

## 韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響

金 哲 雄

### 1 はじめに

韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響は、19世紀末に二つの世界像が出会った時以来たえず潜在的に働いており、とくに1970年代以降、プロテスタンティズムに帰依する人々の急速な増大と、韓国の高度経済成長のダイナミズムとが一致して起きた期間に現れている。

この二つのタイプ世界像については、全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化」によれば、次のように論じられている<sup>(1)</sup>。

韓国においては、おそらく他のどの地域よりもプロテスタンティズムと儒教という二つのまったく異なる世界像の強烈な相互干渉が存在するように思われる。儒教は、理念的に性格づけるなら、人間中心主義的・集団主義的世界像であるといえる。儒教は基本的に、人間中心であるがゆえに、此岸志向である。また、儒教の中心的な柱は家であり、その第一次的な美徳は孝行である。この意味で儒教の集団主義的要素は、ほとんどもっぱら家主義という形で現れる。

こうした儒教と比べてプロテスタンティズムは、神教的・個人主義的な世界

---

(1) 全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化」『思想』2005年10月、118～9ページ。

像いうことができる。プロテスタンティズムは、唯一絶対の全能の神への信仰による彼岸志向であり、そして、人間の「原罪」という思想と、救済の絶対的必要性を柱としている。しかも、その救済は、厳密に「個人的な」基盤においてのみ起きねばならないとされている。したがって、その個人主義的要因は、「救済の個人化」という考え方にもっぱら現れていることになる。そして、このコンセプトが世俗化すると近代的な個人主義に通じるようになるという。

そして、集団主義文化は、伝統と権威を強調する。このような権威と伝統を強調する文化的特徴は、韓国社会と教会に影響を及ぼしてきた儒教文化、とくに儒教の政治文化に根ざしている。儒教文化は、韓国社会が集団主義文化を成す際に決定的な役割を果たしており、そして、その最も重要な特徴が権威主義なのである。

本稿では、儒教、とくにその権威主義が韓国プロテスタント教会とそのリーダーシップ形成に及ぼした影響を分析するとともに、それを手がかりに、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動に及ぼしている儒教の影響を明らかにしていきたい。

## 2 韓国プロテスタント教会における儒教の影響

ノ・チジュン「韓国の改新教会内に現れている伝統宗教の影響」によれば、儒教で培われた行動類型と態度は、韓国改新教会（プロテスタント教会）にかなり強力で、広範にわたる影響力を及ぼしたのである。ここでは、その影響について次の四つに整理されている<sup>(2)</sup>。

第一に、儒教の本質がどうであれ、儒教は権威主義的性格が強力に現れる。韓国教会の場合、この権威主義的性格が様々な側面できわめて強力に現れる。まず、教会の教役者（伝道師）をみれば権威主義的性格は、教役者が神の代理

---

(2) ノ・チジュン (노치준) 「韓国の改新教会内に現れている伝統宗教の影響」『光州開放大学論文集 (관주개방대학 논문집)』第4号、1987年、47～9ページ参照。

人という意識のなかでより強化される様子がうかがえる。そこで、教役者の失策に対する咎めとか、忠告さえ拒むのである。韓国教会の運営方式は、ほとんど権威主義的である。韓国改新教会の三分の一以上を占めている長老教における堂会は、牧師と長老で構成されている。そして、教会の意志決定における堂会の影響力は、ほとんど絶対的だといえる。もちろん、このような慣行が現れる場合には他の要因も適用されているものの、韓国教会の権威主義的性格がその土壌になっていることは事実である。

第二に、儒教の特性における一つは、倫理的面をとっても強調する点である。忠孝の倫理を強調する儒教文化のエートスが韓国教会に影響を及ぼし、説教においても宗教的特性を強調するよりは倫理問題を主に取り扱う傾向がある。もちろん、このような倫理の強調が韓国キリスト教徒の倫理性を高める上で肯定的に適用される一方、パリサイ派（キリスト時代のユダヤ教の一派）的、律法的なメンタリティーを強調したことが問題点として提起されている。

第三に、儒教の伝統のなかで最も強力な組織原理の一つとして、家族主義が考えられる。家族主義の核心を第一、社会の基本構成単位は個人ではなく家族集団であり、第二、この家族集団は国家を含めた他の社会集団よりも優先させる信念に基づいてものとしてみれば、家族主義は韓国教会において次のように現れる。1960年代、70年代に急激に成長した教会は、伝統的な家族の機能の一部を担当するようになり、その結果、家族主義的組織原理が教会においても多く現れるようになった。韓国教会の牧会構造は、集团的・家族的な礼拝と説教以外は消極的であり、儒教的精神構造の集団性に基づいてものになっている。このような家族主義的・集团的牧会構造は、教会の量的膨張と構造の大型化をもたらすけれども、各信徒の真の自覚と霊的成長が困難になっていると批判されている。このように、儒教の家族主義は、韓国教会の個教会主義形成の母胎になってしまった。その結果、韓国教会は、社会問題に対する関心が弱くなり、宗教の本質的機能である隣人の役割をうまく遂行できなくなってしまったのである。

第四に、儒教は、どこまでも保守的性格を強く持っている。韓国儒教は、韓国の伝統社会が改革的な方向を取る上で障害要素になっていることは否定でき

ない。もちろん、韓国教会が世界のどの国の教会よりも保守的な性格を示すことは、韓国教会自身の伝統、とくに韓国にキリスト教を伝播した宣教師たちが米国でも最も保守的で、福音主義的な性格を持っていたからである。儒教の影響を強く受けて形成された韓国教会の保守的性格は、神学の理解において硬直性をもたらし、教会分裂、とくに長老教会の分裂現象を招いたのである。とにかく、現在の韓国における大部分の教会においてみられる保守信仰は、儒教の土壌に生じた産物だといえるのである。

しかしながら、ソン・ソニョン「21世紀における韓国宗教の展望と課題」によれば、韓国社会において儒教とキリスト教徒とが対立する範囲は、次のように宗教的次元までには至っていないという<sup>(3)</sup>。

「21世紀における韓国宗教の展望と課題」では、韓国の代表的な宗教が、共同体精神の根本的出発点としての孝を重視しているとみている。ここでみられる特徴点は、朝鮮時代を経ながら完全に定着した共同体倫理文化が、今日、韓国社会における共同体倫理文化の本質になっている。このような点は、儒教が持っている宗教的影響というよりは社会の倫理的実体として適応し、共同体意識を根拠として確立された伝統として定着したことを意味する。このような脈絡において、仏教とキリスト教は、韓国社会において依然として、解脱と救済という宗教の究極的目的を志向しているのである。

しかし、今日のようにたえず変化している社会状況を考えると、宗教が強調している共同体精神は、多くの葛藤の要素を持っている。それは、宗教の範囲を超えることのできない限界を持っているため、結局、各宗教の信念体系の枠から提示される倫理的生活様式は、教理間の葛藤を誘発することにもなる。確かに今日、倫理的生活様式における仏教とキリスト教間の葛藤、とくに儒教的生活様式とキリスト教間の葛藤を挙げることができる。例えば、冠婚葬祭、とくに祭祀が、その典型的な葛藤対象である。前者がかなり深刻な社会分裂を生み出す宗教間の葛藤であるとするならば、後者は、社会において自然的な関

---

(3) ソン・ソニョン (송선영) 「21世紀における韓国宗教の展望と課題 (21세기 한국 종교의 전망과 과제) - 受容と思维体系を中心に (수용과 사유체계를 중심으로) -」 『佛敎研究』第18号、2002年、219～20ページ。

係が可能になっている。

それにもかかわらず、韓国においてキリスト教信仰の主体がまさに韓国人であるがゆえに、キリスト教徒たちは伝統的思惟体系および生活様式から大きく逸脱することはできない。例えば、儒教的伝統である集団の祭祀は、キリスト教的追悼礼拝という形態として反映されてきた。これは、儒教とキリスト教は、宗教間の深刻な葛藤を生み出さないことを意味している。儒教の本来の意味が、社会現実において倫理的で道徳的な人生を強調してきたからであるという。

また、儒教とキリスト教の調和については、パク・ヒョンスン「韓国的キリスト教リーダーシップが担うべき韓国伝統宗教の文化的特性に関する考察」において、次のようにより鮮明に展開されている<sup>(4)</sup>。

現代の韓国社会において、儒教は一般的に保守的であり、その始祖である孔子は守旧性を象徴する人物として認識されている。しかし、実際には、孔子の教えによる儒教的リーダーシップは、変革志向的で、実用的である点で21世紀の現代社会においても、その効果性は立証できるとする。孔子は、指導者の性格的特性として、勇気と決断性（実践力）、変革と改革を追求する姿勢、状況認識と危機管理能力、信頼性、および謙遜と寛容を強調した。彼はまた、指導者にとって理論的知識と実践的知識の調和を強調して、理想と現実の均衡と調和を重視するリーダーシップを強調した。このような儒教的リーダーシップの特性は、本質的に現代のリーダーシップ理論で追求されている価値観とか、方向性とはそれほど違ってはいない、というのである。

それにもかかわらず、儒教が若い世代に保守的で、守旧的性向の宗教として認識されている根本的な理由は、禮思想に基づく等差的価値観のためである。儒教の人間関係の強力な三綱五倫の原理は、現代的生活のパラダイムににんじて変化しなければならない、と考えられている。そして、新しい世代は、現実世界において伝統的価値観を拒否し、相対的価値観を追求するようになる。そ

---

(4) パク・ヒョンスン (박형순) 「韓国的キリスト教リーダーシップが担うべき韓国伝統宗教の文化的特性に関する考察 (한국적 기독교 리더십이 지녀야 할 한국 전통 종교의 문화적 특성들에 관한 고찰)」『大学と宣教 (대학과 선교)』第5号、2003年、228～9ページ。

れによって、価値観の混乱と葛藤をもたらす社会的アノミー（無統制）が生じている。このようなアノミー現象は、インターネットを通して検証されていない情報の氾濫によって、より一層増大しているという。

韓国教会が、このような社会的アノミー現象から社会と教会共同体の秩序と調和を守っていくためには、教会のなかに社会的変革に対処できる、リーダーシップ・パラダイムの転換が生まれなければならない。韓国教会の新たなリーダーシップのパラダイムは、聖書的価値観の基礎の上に、韓国社会の伝統的価値観と新しい価値観が調和する、韓国的キリスト教文化を追求しなければならないのである。これは、キリスト教が韓国文化のなかに溶解されながら、韓国の宗教的文化的実体として位置づけられ、韓国社会のすべての分野にわたって新しい韓国的キリスト教文化を表出させることを意味するものだ、と主張されている。

### 3 韓国社会の垂直的集団主義と権威主義

#### (1) 垂直的集団主義

文化を理解する上である社会の文化を規定する一つの特徴として、個人主義と集団主義との相違点を見ることは、各個人の間を関係を理解する一つの重要な要素になる。個人主義とは個人間を連結している様子が緩んでいて、互いに独立した様子を示している社会パターンを意味し、集団主義は個人間が緊密に連結しており、相互依存的社会パターンを指す。しかし、同じ集団主義文化圏にある韓国の集団主義は、イスラエルのものとは異なり、同じ個人主義文化圏にある米国の個人主義は、スウェーデンのものとは異なっていることに留意すべきであろう。そこで、TriandisとGelfandは、個人主義・集団主義が水平的・垂直的社会関係と連関していることを明らかにし、文化の四つの形態を主張した。すなわち、水平的集団主義、垂直的集団主義、垂直的個人主義および水平的個人主義である（表1参照）。

表1 文化の四つのタイプ

垂直的	垂直的個人主義 (米国)	垂直的集団主義 (韓国)
水平的	水平的個人主義 (スウェーデン、オーストラリア)	水平的集団主義 (日本、イスラエル)

(出所) ケ・チェガン「儒教文化が韓国教会のリーダーシップ形成に及ぼす影響－儒教の権威主義的影響を中心に－」韓国実践神学会『神学と実践』第22号、2010年、82ページ。

日本とイスラエルのような国が属している水平的集団主義文化において、人々は自分自身に対して他人とは類似している考え、また、他人と共に追求すべき共同の目標を強調するが、しかし、権威に対しては、たやすく服従しようとはしない。米国のような国が属している垂直的個人主義文化において、人々は各自独立した個体として対処されることを望み、地位においては他人とは区別されるべきだと信じる。スウェーデンやオーストラリアに属している水平的個人主義文化において、人々は各人が集団とは区別される存在であることを望むものの、地位においては人々は互いに同等であると考え。

これらに対して韓国社会は、地位に従う等差を主な特徴とする垂直的集団主義文化を持っている。集団内での人々は、地位に従って互いに違った事実を受け止める。韓国のような垂直的集団主義文化における人々は、年齢、年功序列、その集団に対する貢献度に従って決定された階級と地位を重要に考えるため、これらの要素に基づく差別的で、等差的な取り扱いを当然のこととしている。このように韓国社会は、各自が成し遂げる仕事や技術に根拠を持つシステムというよりは、年功序列に基盤をおく賃金体系を備えている。また、垂直的集団主義文化においては、自身を集団の一部とみる文化的特徴を持っているので、人々は集団における統合と集団の目的のためには個人の目的を犠牲にすることを強調するのである<sup>(5)</sup>。

(5) ケ・チェガン (계재광) 「儒教文化가 한국教会의 리더십 형성에 미친 영향」－儒教의 권威主義的影響を中心に(유교의 권위주의 영향을 중심으로)－ 한국실천신학회 (한국실천신학회) 『神学と実践 (신학과 실천)』 第22号、2010年、83～4ページ。

そして、韓国のような垂直的集団主義文化は、伝統と権威を強調する。このような権威と伝統を強調する文化的特徴は、韓国社会と教会に影響を及ぼしている儒教文化、とくに儒教の政治文化に根ざしている。儒教は、韓国社会が垂直的集団主義文化を成す際に決定的な役割を果たしたといえる。そして、儒教の最も重要な特徴が、次にみる権威主義なのである。

## (2) 権威主義

儒教は、1500年前の三国時代初期に韓国に紹介されたが、韓国の統治理念として地位を得たのが1000年前である。それ後の16世紀中葉以降、儒教が朝鮮の政治システムとして花咲くようになった。朝鮮時代の儒教が貴族的、学究的であったにもかかわらず、儒教によって、人々の思想、性格が変わっていった。日本による植民地の時期においても、日本は、韓国に対する支配を広げるため儒教の価値と規範を利用することによって、国家に対する忠誠、服従を強要した。さらに解放後には、政治指導者も、儒教の権威に対する服従、国家に対する忠誠を浮き彫りさせ、国家の実体性と権力の安定を図った。

1984年に実施されたアンケートによれば、人口の0.5%のみが自分自身を儒教人だと称したが、韓国人の91.7%は、彼らの行動と認識に儒教の影響を受けていると回答した。そして、仏教徒の100%、プロテスタントの76.6%、カトリックの90%が暫定的儒教人として現れている。このように儒教が韓国人の生活の深いところまで浸透している状況において、その肯定的な部分もあるが、権威主義のような否定的な要素が内在していることを看過してはならないのである<sup>(6)</sup>。

すでに述べたように、権威主義の様子がよく分かる韓国人の垂直的集団主義は、儒教文化の影響が大きい。持続的に韓国社会に影響を及ぼしてきた儒教の政治文化と、権威主義の特徴が一致しているからである。権威主義とは、すべての人間関係を上下に等差させて支配、服従の关系到定型化させ、上位者の絶対的支配と下位者の無批判的服従を要求する性向である。このような傾向は、儒教の最も大きな機能の一つである禮や名分を絶対的に解釈し、人間差別を当

---

(6) 同上、86ページ。



然視してきた朝鮮時代の家庭禮制を中心に現れ、韓国人に権威主義の属性を拡大、強化、深化させたのである<sup>(7)</sup>。

この儒教の政治文化は、成立した権威に対して服従を強要する反面、権威を付与された側においては、強力な権威主義の形態という特性を持つことになる。儒教の政治文化が示す権威主義の特徴は、次の三つに整理することができる。

第一は、支配・服従性である。それは、その社会に法的、道徳的に成立したと認識された権威に対する強力な服従を要求することである。最も特徴的なものの一つは、成立した権威が強力であれば、カリスマ的な権威に対する憧憬が現れる。第二は、階層的性向である。それは、人々を階層的に分類し、秩序を付与することによって、社会秩序を得ていこうとする。とくに、このような階層的な性向は、中央集権化された全体主義の正当化をもたらすようになる。第三は、因習（伝統）主義である。それは、その社会に成立した権威により承認された、社会の伝統的慣習、規範を強力に受容し、それに従って実行することを意味する。因習主義は、自然に伝統的な男女支配社会を承認するなど、優劣の一般化をもたらすとともに、変化と自由を制限して権威主義を正当化する。

このような権威主義を、韓国社会は必要とした。日本帝国主義による植民地時代と、朝鮮戦争が終了した後、韓国が国家経済システム再建のため、非常に努力することは当然のこととされた。工業化による国家の経済発展は、1961年から1992年まで治めていた軍事政府によって加速化された。命令と服従を特徴とする、この軍事独裁時代によって、既存の儒教的権威主義文化がより一層、韓国社会に受け入れられるようになったのである。

垂直的集団主義的でありながら、権威主義的な韓国社会の文化によって、韓国教会も、このような影響から逃れることはできなかった。韓国教会が社会から受けている権威主義の影響は、持続的である反面、教会が社会に影響を及ぼす影響は、それほど多くはないように思われている。

この権威主義についてキム・マンギュは、「宗教的社会運動としての東西思想の交感」において、自由民主主義社会の醸成という視角から東西思想の交感

---

(7) この儒教文化と権威主義との関係について詳しくは、同上、86～9ページ参照。

と再照明を通して、次のような課題に留意している<sup>(8)</sup>。

韓国人の意識構造支配してきた儒教思想の核心、すなわち権威的支配の政治文化から脱することが、重要な課題になるだろう。韓国においては事実、修身齐家治国平天下を強調する社会化過程を通して、家族国家を統治しよとする権力志向の意識構造が形成されてきた。このような思考から、独善と排他の政治文化が成り立ち、権力の主体が植民統治権力であれ、米軍政であれ、または軍事独裁であれ、これに密着しようとする非道徳的政治文化の跋行性がみられてきた。したがって、なりよりもまず、韓国人の同質性を破壊し、葛藤を助長させてきた差別原理を本質とする、儒教的倫理観から脱皮する必要があるだろう。このような差別倫理観によって、特権意識と官職思惟観が韓国社会における民主化の最大の障害物になっている。差別は結局、排他と独善意識を生み出すようになってしまう、と主張されている。

#### 4 韓国教会のリーダーシップ形成における儒教的権威主義の影響

韓国教会は、儒教、とくにその権威主義の影響によって自由な状態におかれているとはいえない。韓国教会に現れている強力な権威主義の影響をみると、韓国教会が社会から受ける影響は持続的である反面、教会が社会に及ぼす影響はそれほど大きなものではないのことが分かる。儒教文化は、教会におけるリーダーシップ信頼体系に持続的に影響を及ぼしてきた。とりわけ、儒教文化と軍事文化の権威主義は、韓国教会に影響を及ぼした。その様子は、権威に対する服従を強調するカリスマ的なりリーダーシップ、中央集権化された階層的リーダーシップ、そして不平等を認める地位に従うリーダーシップの形態として現れる。以下では、権威主義の影響により、韓国教会（プロテスタント教会としてとらえても差し支えないだろう。キリスト教徒の約80%はプロテスタントであるから

---

(8) キム・マンギュ (김만규) 「宗教的社会運動としての東西思想の交感 (종교적 사회운동으로서의 동서사상의 교감)」『東学学報 (동학학보)』第6号、2003年、43ページ。

である)に現れているリーダーシップの状況を見ることにする<sup>(9)</sup>。

### (1) カリスマ的リーダーシップ

儒教的権威主義は、支配と服従を強調する強力なカリスマ的リーダーシップを作り出した。儒教の政治文化は、変化と自由に対しきわめて抵抗的であったし、体制維持に重点を置いた。したがって、そこでは、個人の意志と創意性が抑えられ、自由で躍動的な社会創造する風土とは対照的であった。権威主義的リーダーシップは工業化と現代化を経て、軍事文化と出会いながらより強力なカリスマ的リーダーシップを作りだし、また、韓国教会にも、多くの韓国のキリスト教徒に対しても、影響を及ぼした。それは、歴史を通して、韓国教会や韓国政治を導いたカリスマ的なリーダーの権威主義的な特性のためである。

韓国教会において、地位と身分に従った服従を強調する儒教的権威は、本人自らが最も重要な教会のリーダーと認識している韓国の牧師と長老たちに影響を及ぼしたのであった。キリスト教聖徒たちがリーダーのカリスマ的権威を期待し始めると、キリスト教徒としての実体性よりは儒教的実体性に陥ってしまうことになる。このように韓国教会内に独特なカリスマ的リーダーシップを作り出し、その影響が現在でも依然として残っているのである。

### (2) 階層的リーダーシップ

儒教の権威主義的影響により、韓国教会のなかに中央集権的な階層的リーダーシップが生まれる。階層的リーダーシップは、すべての関係が性別、年齢、階層、地位に従って階層的に成り立っている。儒教的権威と服従の垂直関係は、上下の二分化された関係により、下位者は上位者に徹底的に順応し服従する特性がみられる。

儒教において父は、最も重要な権威の一つである。父母と子女の関係は、この社会におけるすべての関係の根幹を成している。孝という概念は、家族を標本として、社会における他の権威まで拡大していった。韓国教会においても、

---

(9) ケ・チェガン前掲論文、89～95ページ参照。

長老は、儒教の概念の年を取った大人と連関している。このような孝から始まった価値観は、韓国儒教の階層構造を成す核心となっているのである。儒教において孝に対する強調は、父母と大人に対する絶対的な服従を、社会的意味と美德として強調することと関係している。儒教文化と伝統は、すべての社会のための階層的システムの重要な根幹になってしまったのである。

このような社会文化の影響が、韓国教会の内部に明確な階層的リーダーシップを生み出したのであった。堂会が決定を下ろせば、その決定が階層構造原理によって、執事あるいは、その聖徒たちに知らされる。しかし、個別教会において行使される権威構造は、合理的な構造というよりは、すべての力が集中された中央集権的である。したがって、下の方からなされた対話が上の方へ伝達されるというよりは、常に上から下へと伝達される下降伝達式の対話が主として存在するようになる。韓国教会は、ある意味では、中央集権が最も著しく制度化されている組織だといえる。韓国教会には、誤解と失敗を生み出す、非効率的な対話が常に交わされるだけである。このように、権威主義の影響による階層的リーダーシップは、韓国教会に世代間の対話の不足と委任の難しさを招くようになったのである。

### (3) 地位に従うリーダーシップ

韓国教会の内部には、不平等と差別を認める、地位に従うリーダーシップが際だっている。地位従うリーダーシップは、自然と伝統的な男女支配社会を承認し、また地位に従う不平等と差別を認める。儒教の影響ゆえに、牧師と長老の地位に従うリーダーシップが、韓国教会において現れている。多くの韓国の執事や勸使（布教師）は、長老の地位を得るために努力し、多くの牧師はまた、役職に就くために努力しようとする。これは、朝鮮王朝時代の官職に該当する、地位に従うリーダーシップを追求する現象であるといわれている。

キリスト教が韓国に伝えられた時の長老制度というものは、韓国社会に成熟した概念ではなく、すでに存在していた儒教の文化、社会的構造によって韓国社会に最もうまく受け入れられた。また、人々は、教会のリーダーシップとは有識で、生活経験豊かな男性大人の任務だと考えた。韓国教会は、最高職分の長

老で構成されている堂会とか、企画委員会がほとんど絶対的権限を持っている。

このシステムは、伝統に立脚しながら強力な中央決定構造を持つ反面、コミュニケーションが制限されている。大部分の教会において平信徒（役職に就いていない一般の信者）は事実、自らの意見を披露できる適当な装置がないのである。多くの平信徒たちは、教会が社会において重要な役割を果たさなければならぬと思いつつも、堂会に教会のすべての決定権が集中しているため、それに参与することができていない。堂会は、教会の重要な職務を果たしているが、しかし大部分は教会の内部的な維持および財政に関する部分の職務を成し遂げているだけである。一方、大部分の平信徒たちは、与えられた任務を果たしている状況である。

## 5 韓国プロテスタントの経済活動における儒教の影響

全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化」によれば、韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響、その「儒教化」、さらには「韓国化」に関する仮説は次の二つである。一つには、救済の主体としての個人は、集団、とくに家族によって、または民族によって取って代わることになり、二つには、救済の彼岸性は、実質的に此岸における救済へと変形していったことである<sup>(10)</sup>。

救済の理念の世俗化を示す、儒教の影響が最もよく現れているのは、プロテスタンティズムが祖先崇拝の問題に対して融和的かつ友好的な対応をしていることである。また、そのもう一つの例証は、1919年の三・一独立運動の指導者たちのなかでプロテスタント信者の率が非常に高かったことである。日本の支配からの解放後も、その民族的救済は、経済発展の問題として、南北分断の問題として現れることとなった。

これらの点と関連して、全聖佑が主張している「プロテスタンティズムの個

---

(10) 全聖佑前掲論文、119～23ページ参照。

人主義（宗教的および世俗的な意味での個人主義）と彼岸志向が、単純に集団主義此岸性にとって代わられたのではなく、この二つの世界像の間でダイナミックな『チェック・アンド・バランス』がたえず働いて、どちらかがどちらかに完全に吸収されるというのではなかった。…『個人化した集団主義』もしくは『集団へと転化した個人主義』とでもいうことになる<sup>(11)</sup> という見解は注目に値するだろう。

この仮説によれば、韓国のプロテスタント（中産層の中核）の大多数は、個人化というプロテスタント的な要請からの来るプレッシャ、不安と心配という社会的・心理的な状況に置かれているのである。これは、プロテスタンティズムにおける「人間は救われるか滅びるかあらかじめ神の意志によって定められているとする」という「予定説」の内的葛藤と類似しているように思われる。このような社会的・心理的なあり方こそは、マックス・ヴェーバーによれば、プロテスタントたちの「世俗内的禁欲」、「資本主義の精神」の源泉であり、近代資本主義を促進させるものであった。

そして、全聖佑は、韓国のプロテスタント信者たちと、500年近く前の西ヨーロッパのプロテスタント信者との間にみられる三つの重要な違いを次のように示唆している。第一に、極度の不安と心配に苦しむ主体は、韓国の場合、西ヨーロッパのプロテスタント信者におけるような「個人」ではなく、家族、教会などの様々な形態の集団である。第二に、「私は救われているのだろうか、あるいはそうではないのだろうか？」という問いに加えて、韓国のプロテスタントが悩む問いは、「私はプロテスタントなのだろうか、あるいは儒教の信者なのだろうか？ 私は個人主義者なのだろうか、あるいは集団主義者なのだろうか？」というふうに表示することができる。第三に、西ヨーロッパにおけるような「禁欲主義」を生み出しはしなかったが、韓国独特の活動性、いわば「せかせかした性分」というべき活動性を作り出した。この活動性は、政治的および社会的抗議運動、あるいは経済的發展に、建設的にも破壊的にも適用されるように

---

(11) 同上、120ページ。

なった<sup>(12)</sup>。

また、韓国プロテスタントの経済活動における儒教の影響を考える際には、1997年に生じた東アジア経済危機の要因をどのようにみるのが重要になってくる。というのは、これらと関連して、儒教擁護論と儒教批判論が強力に展開されたからである。儒教擁護論者たちは、既存の伝統的価値を認め、また今後、国家主導型発展の持続性について肯定的な立場をとる。また、その危機の要因については、伝統的価値は無関係であり、外部的要因、すなわち国際投機資本の陰謀において探さなければならないと主張する。一方、儒教批判論者たちは、経済危機の要因を過去の国家主導型発展方式、すなわち政府の権限独占、集団主義、情実主義、政府主導の輸出主義などに求めなければならないとする。したがって、その要因を国内の構造、すなわち権威主義的開発体系を維持してきた構造およびその構造から生じた諸矛盾において探さなければならないと主張している<sup>(13)</sup>。

#### (1) 東アジア経済危機以前の儒教論

東アジア経済危機以前の1980年代末、儒教擁護論としてすでに、中嶋嶺雄「ヴェーバーと東アジアの経済発展」によって次のような議論が展開されていた。すなわち、日本とアジアNIEsといわれる地域は経済的に非常に発展しており、そして、この東アジア地域は、いずれも儒教文化の影響のあったところである。それだけに、これら地域の経済発展は、儒教文化が持った歴史的意味、あるいは社会的な背景と無関係ではないかという議論である。この点に関しては、日本では彼が研究代表者となっている文部省科学研究費重点領域研究の「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」が大がかりな学術的プロジェクトとして進められた。

---

(12) 同上、121～3ページ。

(13) 金哲雄『経済史へのアプローチ（増補版）』大阪経済法科大学出版部、2009年、169～74ページ参照。なお、東アジア経済危機以前の儒教擁護論に関しては、金哲雄「ヴェーバーの儒教論—東アジアの経済発展と関連して—」浅羽良昌編著『経済史—西と東—』泉文堂、1991年、204～12ページ参照。

ところで、儒教文化といっても、その倫理規範や徳目をどのように受けとめるかにおいては諸国家間で様々な違いがある。しかし、その全体としての文化的同一性のなかで儒教文化圏諸国が経済的に大きく発展している現実に注目し、その成功した内発的な要因をアジアの内側からとらえようとする試みがなされた。そして、金日坤『儒教文化圏の秩序と経済』(名古屋大学出版会、1984年) W. T. ドバリー『朱子学と自由の伝統』(山口久和訳、平凡社、1968年)、森嶋通夫『続 イギリスと日本』(岩波新書、1978年)、レオン・ヴァンデルメールシュ『アジア文化圏の時代』(福鎌忠如訳、大修館書店、1987年)などにおいて、東アジアの経済発展に関連した儒教論の展開が試みられた。これらの儒教論によれば、儒教文化の特徴は、次のようなものだといっても不都合はないだろう。すなわち、集団主義、教育重視、倫理的な行動規範などである。

まず集団主義については、家族集団主義(金日坤)、儒教資本主義(森嶋通夫)、共同体主義(ヴァンデルメールシュ)が意味する内容は、ほぼ同じであろう。これらすべては、西欧的な個人主義とは違った一種の集団主義を規範としているのである。ここでは、とりあえず、資本主義の形態であろうと社会主義の形態であろうと共同体主義思考様式が東アジア諸国の飛躍の一要因とみなすヴァンデルメールシュの見解に注目しておきたい。

第二に、儒教文化圏においては教育が重視される点については、中国においては科挙の試験をはじめとして儒教の教義が徹底的に学習され、日本においても、とくに朱子学をはじめとする新しい教義解釈の儒教流派が日本の近代化過程の全盤に対して大きな意味を持った。その場合、これら諸国に共通する漢字学習の持つ教育的・社会的効果が大いに重視されたのである。その結果が東アジア諸国の教育水準の高さ、識字率の高さにつながっているのである。しかし、中国の発展の可能性を高くみているヴァンデルメールシュの見解とは異なって、中国大陸をその対象外とするという見解もある。

儒教文化の第三の特徴は、一種の倫理的な行動規範を持っていることである。この点については、すべての儒教論に共通しているのはいうまでもない。ヴァンデルメールシュによれば、儀礼は一つの道徳的体系である。諸事物の自然的意味と、個人の行う諸行動の間には、形式的適合が存在しなければならない



いが、この形式的適合は、この道徳的体系によってはじめて確認されるのであるとされている。儒教にとっては、個人の活動や行動は、個人によって合目的化される以前に、宇宙の法則と同一である法則に適合していなければならず、このことは、一種の純然たる形式的なやり方以外で考えられないとみなされている。

この倫理行動規範についての考え方は様々であるが、とくにドバリーの解釈はユニークである。その解釈とは、儒教の倫理のなかには、自由で躍動するモメントがあるというものである。しかし、このリベラル的モメントが現実の社会で果たした社会的機能までも問題にする時、ドバリーの説は妥当するかどうか疑問に残る。それに対して、ヴァンデルメルシュは、儒教と社会構造との関連を指摘し、儒教的遺産を今日の東アジア社会の機構の機能のなかにおいて積極的にとらえようとしている。また、ヴァンデルメルシュは、儒教倫理が宗教を支えとしているのではなく「儀礼」(礼)に依って立っていると指摘し、儒教は、宗教的信仰に全く煩わされない、社会的な規範であり、道徳律であるとみなす。いずれにせよ、このような特徴を持つ儒教の教義が今日の東アジアの経済発展のにとって重要な倫理的支柱になっているということが、これら儒教論の共通した認識であった。

それでは、以上の儒教論を、儒教の人間観、それに基づく倫理、またそれが経済の上に及ぼした影響についてのヴェーバーの儒教論<sup>(14)</sup> からしてどのように理解すべきなのか。これら儒教論における共通的认识は、その集団主義、教育重視、倫理的行動規範などを根拠にして東アジアの経済発展を説明しようとするものであった。しかし、これらの儒教の諸特徴は、ヴェーバーの儒教論からして本質的な内容とはいえるであろうか。儒教の諸特徴を考える場合、どこまでも、その本質に基づいているのかどうか重要な問題となるだろう。

ドバリーは、ヴェーバーの人間観を批判して、理想の秩序と現実の状況との間に緊張関係を生み出すことにおいて「天」は、一定の拘束力を有していたと主張し、それを証明するために、ヴェーバーの用語とはかなり違う「予言的」

---

(14) なお、ヴェーバーの儒教論について詳しくは、金哲雄「ヴェーバーの儒教論—東アジアの経済発展と関連して—」、212～8ページ参照。

(prophetic)なる用語を導入する。しかし、この主張は、儒教の非本質的内容から、その本質的内容を批判しているものであり、また儒教には呪術を払拭する「倫理的予言」が欠如していた、というヴェーバーの説を正しく解釈していないものと思われる。

次に、「日本の儒教は中国の儒教と違って、宗教ではなく倫理であります」（森嶋通夫）という場合、これをどのように理解すればよいのであろうか。ヴェーバーの場合、理念型としての儒教としては中国の儒教が考えられていた。この中国の儒教と比較するならば、日本の儒教はさまざまな点で中国のそれと異なっている。知識の手段として思い浮かべられる日本の儒教は、ヴェーバーが理念型として取り出した典籍教養を持つ文人を担い手とする中国のものと違っているのである。両者の儒教は、宗教なのか倫理なのかで区別されるよりは、儒教という宗教において典型的なのかそうでないのかで区別されるほうがより重要であるといえる。

また、典型的な儒教においては、五倫のうち最重要な関係は父子関係であり、息子の父親に対する美德、すなわち「孝」から儒教道徳の他の一切の美德が由来するとみなされる。したがって、日本の儒教は正統派の儒教とはいえない。というのは、「孝」よりも国家（君主）に対する「忠」が強かったように思われるからである。一方、儒教文化圏においても「孝」が強い諸国の場合、政府と企業、企業内部の人間関係などが忠孝一致の集団主義を発揮できる（金日坤）、という考え方が成立し得るかどうかは疑問が残るだろう。

さらに、儒教は旧社会の原理そのものだから決定的に死滅したからこそ、その遺産が発展の諸要請と矛盾せず、新しい思惟様式のなかに再投資される、とヴァンデルメールシュが「儒教ルネッサンス」という視点をとる場合、これをヴェーバー流に解釈すればどういうことになるのであろうか。ヴェーバーのいう理念型としての儒教、その人間観が死滅し、非本質的な儒教遺産である共同主義、儀礼主義、機能主義が近代的な思惟様式の一部として把握されるべきだということになる。

最後に、以上の儒教論を根拠にしてヴェーバー批判を展開しているのが、森嶋嶺雄である。彼は、今日の東アジアの活力ある経済発展の文化的背景を、儒

教に求めようとしている。ただし、この儒教評価は、その積極的な議論展開とは異なって、儒教文化が近現代社会においてすでに死滅しつつあったがゆえに、かえって効果的な規範たり得る、というかなり消極的なものとなっている。また、彼は儒教文化圏でも社会主義の地域ないし国は、なかなか経済発展に結びつかないと考えている。この見解も、経済発展において儒教が何ら重要な意味を持っていないことを物語ってくれているのであり、ヴァンデルメールシュがアジア社会主義諸国、とくに中国の経済発展の可能性を高くみている点とは好対照であろう。

要するに、ヴェーバーが主張したように、儒教の本質からして、儒教によってはどこまでも近代化や工業化は形成され得ないのである。確かに、彼が資本主義生成期の近代を分析対象にしたという時代的制約性は無視出来ないが、しかし、ヴェーバーの儒教論は、儒教の本質と東アジアの経済発展とは何ら関連を有していない点に関して、その有効性を依然として保持しているのである。

## (2) 東アジア経済危機以降の儒教論

東アジア経済危機以降の儒教擁護論として、キム・テマン『儒教文化と東アジアの未来』を挙げることができる。それによれば、「世紀の交代期に、われわれは深刻な価値の困難を経験した。ヴェーバー・テーゼを再び読み、新たな視角を批判・検証してみた。アジア経済において儒教の肯定的役割を想起しながら、経済発展に文化が及ぼすことのできる影響を検討した。『儒教的価値』、そのなかでも家族の意味は、どの社会を問わずきわめて重要な単位を構成する要素であるがゆえに、アジアの経済発展においてもきわめて重要な役割を演じた。儒教的家族観というのは、家父長的・年功序列的位階関係に基づいているので、企業の形態もやはり家族本位的な財閥構造を生むことができる良い条件を提供するようになった。アジア地域の企業の大部分が家族を核心単位とする理由は、まさにここにあるだろう。韓国経済発展において財閥が及ぼす肯・否定的影響をあまねく共感しながら、肯定的要素を発掘しようと努力した」<sup>(15)</sup>と

(15) キム・テマン (김태만) 『儒教文化と東アジアの未来 (유교문화와 동아시아의 미래)』 図書出版チョンマン (도서출판 전만)、2002年、169 ~ 70ページ。

主張されている。

また、ヴェーバー・テーゼに関する次のような見解にも問題が残るであろう。中国において「資本主義経済認識が欠如しているだけでなく、根本的に血縁から出発している孝と忠、そしてこれを根幹とする礼節社会は、経営マインドを誕生させることはできなかったことである。それだけでなく、このような構造においては自然法とか、形式論理および自然科学的の思惟が欠如せざるを得なかったと結論を出す。しかし、はたして儒教文化圏の伝統主義、アニミズムの祖先崇拜、情意の人間関係、無条件的現世肯定などのような要因を挙げ、資本主義未発達の原因と判断できるのか。そして、逆説的に、ヴェーバーが指摘した点のはたしてアジア的なものなのだろうか」<sup>(16)</sup>と。

もう一つの儒教擁護論（レジ・リトルほか『儒教ルネッサンス』）では、「1997年のアジア経済危機は、儒教社会の中核をなす中国・日本・韓国・香港・シンガポールにはある程度の影響しか及ぼさず、むしろ儒教社会の周辺の国々に深刻な打撃を与えた。にもかかわらず、西洋のオピニオン・リーダー達、この危機を、西洋の優位は絶対に揺るぎないという誤った印象を与えるのに利用した」<sup>(17)</sup>、「アジア経済危機は、アメリカが、儒教経済圏の中核をなす国々の持続した急速な経済発展を無視しようとする傾向の起因となった。アメリカは、儒教的な経済、製造、人的資本の伸びゆく力をまったく理解していないし、ヨーロッパの啓蒙運動に端を発した合理的で普遍的な価値観へのアメリカ人特有の信念と相容れない異文化に対して、ますます傲慢になっている」<sup>(18)</sup>と述べられている。

一方、儒教批判論として、キム・ウンヒほか『韓国型資本主義の解明』を紹介することにする。そこでは、「経済危機を文化的観点から論ずるにあたって、筆者たちは既存の『アジア的価値』、或いは『儒教資本主義』に関する論争でみられる、儒教に対する単線的理解を止揚しようと思う。・・・国内外の大部分の学者や経営者が、東アジア各国の文化的伝統の詳細な差違について・・・、

(16) 同上、43～4ページ。

(17) レジ・リトル、ウォーレン・リード、池田俊一訳『儒教ルネッサンス』たちばな出版、2002年、2ページ。

(18) 同上、4～5ページ。

政府と民間経済との間の関係も異なり得ることを考慮しないまま、東アジアの経済構造を儒教的資本主義という一色で描き、アジアの価値が失敗したとか、しないとか言う単純な二分法的論理にしがみついている<sup>(19)</sup>と述べている。

そして、儒教資本主義で論議される内容は、まず、儒教で強調する人和団結は、西欧の個人主義よりも企業活動の点でより効率的であり、また、儒教社会では、位階意識が強いだけに社会秩序を正しやすく、国家の権威が尊重されていて、経済政策を実行する場合にも効果を上げることができ、さらに、教育が重視され、勤儉節約が強調される儒教的価値観も、経済を発展させるのに一役を買っている。要するに、このような儒教的価値観を伝統として重視するアジア諸国では、資本主義が栄えることのできる肥沃な土壌を持っている、とみなされている。『韓国型資本主義の解明』では、この儒教資本主義に対する批判を次のように整理している<sup>(20)</sup> (表2参照)。

第一に、政府と財閥の結託関係が結局、経済危機の主犯であるということである。官僚と企業の間を広がっている不正腐敗の環を断ち切ることのできる特效薬は、競争に基礎を置いた自由市場経済だけだと忠告する。第二に、政府の巨大な力が、結局アジアの経済と政治を滅ぼす原因となっているということである。第三に、儒教の温情的・道徳的情緒に基づく企業経営に問題があるということである。終身雇用制度、年功序列に基礎を置く昇進・給与制度は、非効率的であり、生産性を低下させるものである。

表2 儒教的価値の相反する評価

肯定的評価	(1) 権威の尊重、秩序維持、(2) 人和団結、 (3) 家族中心の安定した社会、(4) 温情主義。
否定的評価	(1) 権威主義、(2) 派閥・縁故主義、(3) 家族・血縁主義、 (4) 非競争社会

(出所) キム・ウンヒ、ハム・ハンヒ、ユン・テクリム、櫻井浩訳『韓国型資本主義の解明』九州大学出版会、2001年、118ページ。

(19) キム・ウンヒ、ハム・ハンヒ、ユン・テクリム、櫻井浩訳『韓国型資本主義の解明』九州大学出版会、2001年、ii。

(20) 同上、117～9ページ。

現在、韓国で争点となっている政経癒着、労働市場の柔軟性、整理解雇、経営の透明性、構造調整、財閥改革などの諸問題は、富の蓄積と所有、仕事、その他の経済行為に対する儒教の影響と別個に切り離して考えることはできないといえる。また、政治家と経済人の癒着関係がいつから、どのように始まったのか、経済活動の縁故主義の文化的な根っこはどこにあるのかなどの諸問題の歴史的根源も、探求されなければならないだろう。この度の経済危機は、朝鮮王朝時代の儒教的国家論とそれが招いた行政の病弊、そしてそれに伴う終局的国家破綻を想起させてくれているのである。

櫻井浩は、『韓国型資本主義の解明』の「訳者あとがき」において、本書が「韓国の企業経営や財閥と政府の関係、あるいは労使関係を始めとする企業内人間関係など、韓国における経済活動における特性とその歴史的由来などを理解するうえ」で大変助けになるとし、「本書で述べられている韓国資本主義の性格を規定する韓国特有の文化的、政治的あるいは社会的基盤と、その上で活動する企業、とくにこれまで韓国経済をリードしてきた財閥企業の行動にどのような特徴が表れているか」を次のようにまとめている<sup>(21)</sup>。

「1.経済活動の基盤（ソフト・インフラストラクチャー）」については、①利潤追求、富の蓄積に否定的な文化的風土、②人治（徳治）の要素をもつ政治文化、③人縁、人情などを重視する社会風土、「2.企業行動の特徴」については、①政経癒着、②企業の人治と経営の不透明性、③所有と経営の一致、④外部重視の経営、⑤共同体的労使関係を挙げている。

以上の東アジア経済危機以前と以降の儒教論を総合的に判断すると、また、ヴェーバーの儒教論からも、さらに、この経済危機により、儒教が生活に最も深く根づいている韓国で最も深刻な打撃を受けたことを留意するならば、儒教擁護論よりも儒教批判論の方がより説得力があると考えられる。これと関連して、韓国が、東アジア社会のなかで珍しくキリスト教が定着し、しかも1960年代以降の急速な経済成長の過程でプロテスタント人口が著しい増加をみせてきた社会であること、このように経済成長とプロテスタント数の増大が同時に進

(21) 同上、159～62ページ。

行していることを考慮に入れるならば、韓国プロテスタント教会における儒教の影響と同様、韓国プロテスタントの経済活動における儒教の影響も無視できないものとなっているといえる。

## 6 おわりに

以上のように、儒教、とくにその権威主義が韓国プロテスタント教会とそのリーダーシップ形成に及ぼした影響を分析するとともに、それを手がかりに、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動における儒教の影響をみてきた。

すでに述べた、プロテスタンティズムと儒教の関係を考える場合、その両者の調和に力点を置くのか（ソン・ソニョン「21世紀における韓国宗教の展望と課題」、パク・ヒョンスン「韓国的キリスト教リーダーシップが担うべき韓国伝統宗教の文化的特性に関する考察」など）、それとも対立に力点を置くのか（全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化」、ノ・チジュン「韓国の改新教会内に現れている伝統宗教の影響」、ケ・チェガン「儒教文化が韓国教会のリーダーシップ形成に及ぼす影響—儒教の権威主義的影響を中心に—」、キム・ウンヒほか『韓国型資本主義の解明など』）によってその見解が異なってくる。ただ、全聖佑によれば、韓国型の近代化に固有のダイナミズム、そして、建設的および破壊的性格という二重性格は、それ以外のより具体的な構造的かつ歴史的な要因を別にすれば、個人主義と集団主義という明らかに融和不可能な二つの世界像のパラダイムによって生み出されたたえざる不安、心配、緊張に存していることになる<sup>(22)</sup> という見解は注目しておくべきだろう。

このプロテスタンティズムと儒教の関係について、筆者は、調和的、融和的な点もある程度はあると認めながらも、基本的にはその関係を対立的、葛藤的な観点からとらえ、そして、プロテスタンティズムに及ぼしている儒教の影響を克服すべき対象だと考えている。

---

(22) 全聖佑前掲論文、122ページ。

前述した、儒教文化が韓国教会のリーダーシップに及ぼした影響についての見解は、明らかに両者の関係に対立的な観点からみたものであろう。垂直的集団主義を現している韓国社会は、儒教文化の影響を最も多く受けてきたことを論じている。また、リーダーシップに関連した儒教文化の最も大きい特徴の一つとして、権威主義をみることができた。権威主義は、すべての人間関係を支配と服従の関係に定型化する傾向として、三つの特徴を現す。すなわち、権威に対する強い服従、中央集権化された階層的傾向、および地位に従う不平等と差別を受け入れる因習主義である。

このような儒教的権威主義の特徴は、韓国教会のリーダーシップ形成に影響を及ぼした。その影響は、第一に、上位の権威に対する服従を強調することによって、キリスト教徒の実体性まで崩すしてしまうカリスマ的なリーダーシップ、第二に、堂会にすべての力が集中している中央集権的な制度を強調することによって、委任しようとしないう階層的リーダーシップ、第三に、教会における個人との関係が性別、年齢、信仰の年数などによる等差と差別を受け入れることによって、位階序列的な地位に従うリーダーシップとして現れた。

この三つのタイプのリーダーシップを克服するためには、リーダーシップの一部分だけに焦点を当てるよりは、リーダーと聖徒個人の実体性、リーダーと構成員との関係、そして教会共同体全体の組織構造を共に結合させることができるリーダーシップの開発が必要である。権威主義的リーダーシップを変革し、新世代を抱くことができるリーダーシップは、教会において個人の霊的成熟と組織の構造的変化を共にもたらさなければならない。したがって、新しいリーダーシップは、第一に、カリスマ的なリーダーシップではなく、服従と支配でない他者に仕えるような通典的品性が強調されるリーダーシップ、第二に、等差と差別を強調した位階序列的な地位に従うリーダーシップではない、開かれた意思疎通を通じてお互いが信頼できるリーダーシップ、第三に、中央集権的な上から下への指示だけがある階層的リーダーシップではなく、委任を通して教会のビジョンを有能に実践できるリーダーシップが必要である<sup>(23)</sup>。

---

(23) ケ・チェガン前掲論文、100～1ページ。



以上のような儒教的権威主義が韓国プロテスタント教会とそのリーダーシップ形成に及ぼした影響を手がかりにすると、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動における儒教の影響は、次のように、教会における儒教の影響とほぼ類似の内容が確認できる。

儒教資本主義論では、すでにみたように、儒教社会は、位階意識が強いだけに社会秩序を正しやすく、国家の権威が尊重されていて、経済政策を実行する場合にも効果を上げることができる、とみなされている。このような儒教の肯定的役割をある程度は認めながらも、しかし、儒教的権威主義の経済活動における影響は、第一に、政府の巨大な権威が、経済と政治を減ぼす原因となっているということ、第二に、政府と財閥の結託関係、官僚と企業の間広がっている不正腐敗の環が断ち切れてないこと、第三に、終身雇用制度、年功序列に基礎を置く昇進・給与制度が、非効率的であり、生産性を低下させていることにみられる。

事実、現代の韓国では、政府が民間の経済活動に任意に介入することがしばしばみられる一方、企業の方は、国家権力に接近し、自己の財産や経営の安全を図ろうとするため、政経癒着が生じている。また、財閥のカリスマ的なリーダーシップによるグループ企業の支配のため、経営の不透明性がみられる。さらに、このような権威主義的制度の下では、企業の所有者であるリーダーは、他人を信じて経営を委ねることが危険だと考えるため、所有と経営の分離ができなくなっているのである。このような経済活動における儒教の影響には、権威主義のみならず、それと関連した、派閥・縁故主義、家族・血縁主義、非競争性という否定的な要素が伴っているのはいうまでもないのである。

本稿は、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動における儒教の影響についての試論にすぎない。そのさらなる具体的な検証は、今後の研究課題にしたい。

